

畏友長田豊臣教授の総長御退職を祝って

西川長夫

1

文学部の高橋秀寿さんから、長田さんの退職記念号に私的な思い出を書くようにという依頼をうけたのは、もう数ヶ月も前のことであるが、たとえ友人とは言え、現在、総長の要職にある人について書くのは気が進まないし、もし書くとなればいろいろ差し障りのあるようなことを書いてしまいそうなので、できれば書かないで済ませたいと思っていた。だが高橋さんの督促は次第に厳しくなり、それでも書きしぼっていたのであるが、最近、右足首骨折で入院している長田さんを二度ほど見舞うことがあり、久しぶりに昔のことや四方山話をしているうちに気が楽になり、書いてみるか、ということになった（ただし長田さんに検閲してもらおうという条件で）。それに、もう六、七年も昔のことであるが、私の国際関係学部定年退職の記念論集に、長田さんが「畏友西川長夫教授の御定年を祝って」という心のこもった文章を寄せてくれているので、そのお礼というかお返しをするのが礼儀というものだろう。

当時、長田さんはすでに立命館大学総長になっていたが、その文章は次のように書き始められている。「我が畏敬する友西川長夫さんの定年の報を聞いて感無量である。西川さんと私はここ三十年間文字どおり青春を共にしてきた」。今度は私が同じ言葉を返す番であるが、あれから長田総長の在任期間を加えて、私にはいつそう「感無量」である。三十

畏友長田豊臣教授の総長御退職を祝って

数年間の「青春」というのはいささか長過ぎるが、いまでも顔を合わせば三十数年前と言葉も気分も変わっていないから、この表現は正しいだろう。長田さんとの付き合いは私が立命館に勤めるようになって以来だから、彼との付き合いの思い出を語ることは、私のその間の長い年月の自分史を語ることになる。その間いろいろあったが、長田さんとは一度もケンカをせず、親しい友人であり続けた。これは希有なことであり、とりわけ二人の性格やイデオロギーの違いを考えてみれば不思議なことだ。

あえて二人の共通性を求めるとすれば、ともに幼少期を植民地ですごしたことがあげられるだろう。長田さんも私も朝鮮で生まれ育ち、敗戦の混乱期に引き揚げてきた。もともと私たちの置かれた状況はかなり異なっている。長田さんの父はソウルの警察学校の校長であり、彼は朝鮮総督府の裏手にある官舎で育ったらしい。私の場合は父が軍人で、生まれたのは朝鮮と満州の国境に近い江界という町の陸軍の官舎であるが、父の部隊の移動にともない、北朝鮮の各地を転々として最後は満州の新京であった（国民学校五年生）。だが敗戦後、北朝鮮の平壤（ピョンヤン）に近い鎮南浦という町に十ヶ月ほど抑留された後、母と二人で今で云えば難民として三十八度線を越えてソウルにたどり着く。面白いのは、私たちが数日野宿を重ね、雨のなかをずぶ濡れになり腹をすかせてソウルへの道をとぼとぼと歩いていたとき、警察の上級幹部である長田さんの父親は三十八度線以北からの日本人の引き揚げ者の保護と無事日本に送

りとどける職務を米軍と協力してはたすべくソウルに踏み止まっており（日本の軍隊は武装解除されており事実上機能していない）、長田少年は家族とともにまだ官舎に住んでいて、ソウルの悪童たちと一緒に街中を走りまわっていたらしい。したがって私たちはソウルの戦後の混乱のなかで出会う可能性があった、ということになる。

これは先日見舞いについて聞いた話であるが、長田少年（私より三、四歳下だから六、七歳だろうか）は進駐軍のジープのあとを追ってギブミーチョコレートをやるのに飽き足らず、韓国人の悪童たちを集めて（長田少年は韓国語がべらべらであった）、引き揚げた日本人家族の空家から人形その他の目ぼしいものを集めて、スベニール漁りに忙しい米兵との有利な物々交換を思いつき、大成功を収めたいらしい。本人も認めているように、長田少年には闇屋の大物になる素質があったのだ。・・・そんなわけで、私は難民としてソウルから仁川に送られ、何百人かの脱北者とともにアメリカ軍の貨物船の船底でまるで家畜のように日本（博多）に運ばれて帰国をはたすのだが、米軍とともに日本人の引き揚げ業務に当たっていた長田一家は米軍の保護のもとに比較的恵まれた帰国となったようである。だが引き揚げ後の日本における生活は、おそらく同じように苦しいものであったと思う。後に彼が山村工作隊に加わる一方で、アメリカ人の宣教師と深いかわりを持ち、それが彼のアメリカ史への道を準備することになるといふ物語も、私はつい一引き揚げ少年の戦後の物語として読んでしまう。その他、長田さんの祖父の話など長田一族の植民地における生活と戦後の農村における物語は、実にドラマチックで、日本人にとって植民地とは何であったかを知る上でもきわめて興味深いものであるが、かつて映画監督や映画評論家を志したこともある長田さんには文才があるのだから、ぜひこの記録を書き残して欲しい。総長や大学のつまらぬ役職などは早く止めにして・・・と、つい言いたくなる

ところである。

2

以上は私の長田豊臣論の序論である。これまで幾度も経験したことであるが、幼少期に植民地の生活を送った者にはどこか共通したところがある。大陸的風土の名残であろうか。ある種の茫洋とした細部にこだわらぬ包容力（それは大雑把ないいかげんさに通じるだろう）、環境と既成の慣習に対するある種の無関心と自分で考えようとする傾向（それは時に人を傷つけ、時に秩序壊乱的で村人を苛立たせる）、ある種の合理性と新しいものに対する好み（それはスタイリスタ的気取りに通じるかもしれない）、等々。そうした特徴を思いつくままにいくら列挙してみても結局はうまく説明できないのであるが、犯罪者同士やホモセクシャル同士が何となく相手を認知するように、植民地育ちの人間同士には何となく相手が分かるようなところがある。長田さんに初めて出会ったとき、二言三言口をきいただけで、私はすでに気心の知れた者同士の心安さを感じたことを覚えていた。

さて本題に入らなければならぬ。文学部専任講師として私が立命館大学に採用されたのは一九六六年の十月の初めであった。四十年も昔のことだ。その前に院生時代に二、三年非常勤でフランス語を教えたことがあった。教室には女子学生の姿はほとんどなく、後の席で一見体育会風の屈強な学生が教員に背を向けて新聞を読んでいて、それを叱りつけて前を向かせるにはかなりの勇気がいるような、たいへんな大学だった。私は京大の仏文科の助手をしていたのだが、その年はどうしたわけかフランス語教員の空ポストが多く、私には三つの大学から誘いがあった。そのなかで社会的には一番ランクの低い、しかも仏文科のない立命館を

選んだのは、文学部の教員スタッフの魅力に引かれたからだと思う。

在野のカフカ研究者として知られていた本野享一先生が熱心に誘ってくれた（本野さんは京大山岳部の先輩である桑原武夫先生に相談して、この話が来たのだろう）。また当時文学部に在籍していた梅原猛や高橋和巳とは京大人文研の研究会や日本小説を読む会で面識があった。学長は末川博先生だった。だが何といても目を奪われたのは日本史のスタッフの豪華さで、北山茂夫、奈良本辰也、林家辰三郎、前田一良、岩井忠熊がいた（後に山尾さんが加わる）のだからすごい。もともと私が遠くからひそかに敬愛し目標にしていたのは哲学者の船山信一先生だった（いま私の書棚には船山信一著作集全巻と先生から頂いたフォイエルバッハ全集全十六巻が並んでいる）。白川静先生や三田村泰助先生は別格として、当時の文学部には私のような何も知らない若者を魅惑し、道を踏み誤らせるようなオーラが輝いていたのである。長田さんはその輝かしい日本史学科に入り、西洋史に転向する。いちどその理由を聞いて、いかにも長田らしいと思ったことは覚えているが、肝心の理由の方は忘れてしまった。私が着任したとき長田さんは西洋史学科の助手であった。新任の挨拶をさせた教授会の後で、最初に声をかけてくれたのが中原章雄さんで、中原さんは長田さんの親しい友人であった。なお当時の教授会には助手は出席していない。

文学部の教授会メンバーになって一年後に私はフランスに二年間留学し、これが立命館における私の悪評の発端になった。もともとこれは私が自ら求めたことではなく、ある日突然、ロラン・バルトから私のゼミに來ないかという誘いの手紙と招待状がとどき、それにはフランス政府の奨学金が付けられていたのである。ロラン・バルトが最初の来日で京都に來たとき、私は仏文科の助手をしていたこともあって、二、三日京都案内をした。フランスに留学する気持ちがあるかと聞かれて、ウイと

畏友長田豊臣教授の総長御退職を祝って

答えたことは覚えているが、それがこんな事態になろうとは思ってもやらぬことであった。だが運の悪いことに、文学部では新任の教員の海外留学は最初の二年間は許されないという内規がちょうど決められたところであった。山口文学部長の御尽力もあって私の留学は許されたものの、内規違反の第一号となった。しかも私はその一年の留学を二年に延長してもらおう。さらに二年後の帰国の日を間違えて、一週間も遅れて帰ったのである。帰国すると直ちに主事の永原先生からきついお叱りをうけた。学園紛争の危機にあった大学でこれは許されざる遅刻であったし、永原先生がいかに困惑されたかも今ではわかる。永原先生の次に中原長田の両氏から呼びだしがかかった。そこらへんの事情は、「畏友西川長夫教授の御定年を祝って」から長田証言を引用させていただきたい。

「最初に彼の名前を知ったのは大学紛争の頃であった。当時われわれは荒れる学園で体をはって頑張っていた。下手をすると急進派学生の言うとおりの大学は解体してしまうのではないか、そうしてはならじと、必死になっていた。そういった騒ぎのなかで当時かなり影響力のある総合雑誌「展望」にフランス留学中の仏文学者がカルチュエランの学生反乱についてレポートを執筆した。そのレポートそのものは良質なものであったが、日本で苦労しているわれわれにとつて、そのレポートはあまりにも評論家的に見え、許しがたいものと写った。しかも、その執筆者が立命館の専任教員であることを知ってわれわれは文字どおり怒り心頭に発し、帰ってきたらただではすまさないぞと息巻いた。その仏文学者こそが若き日の西川長夫であった。」

この文章はいま読みかえしてみると、私にとつてかなり好意的に思えるが、しかし総長になったばかりの長田さんの一種の自己弁明というか、微妙なポジションの移動が見えなくもない。たしかに長田さんは「体をはって」学園を守ったであろう。しかし私の印象では、当時の長田さん

は「急進派学生」に対してある程度、心情的同情を感じていたのも事実であろう。「評論家的」という批判の言葉も実務を重んじる立命館的用語で（何代か前の総長が顔をしかめてこの語を乱発していたことを思い出す）、それ以前の長田さんはそんな言葉使いをしなかったのではないか。いずれにせよこの三者会談はきわめて友好的に進行し、中原、長田のお二人は、立命館の現状を懇切丁寧に説明し、私の無知と不明を解いてくれた。この会談は私たちの友情を結ぶ記念すべき出来事で、その後の私たちの付き合いはかなり密度の濃いものになっていった。そのことについても長田証言を引用させていただきたい。

「その後どういいう経緯があったかよくは記憶していないが、気が付いたらすっかり仲良くなっており、週に二、三度は五、六人の文学部の仲間と一緒にフランス料理の食べ歩きを楽しんでいた。立命館育ちの私にとって他大学から来た西川さん達は、新鮮であった。なかでも西川さんは特に優秀であった。じっくりと粘り強く、自分の頭で考えるタイプであった。恐らく京大の良い意味での伝統に連なる人であろう。」

「御定年を祝って」という文章の性格もあって後半はいささか過褒気味で引用がはばかられるのであるが、しかし「じっくりと粘り強く、自分の頭で考えるタイプ」というのは、長田さん自身のことを自ら語っているとと思う。少なくともこれは私の長田豊臣評価の主要な一点だ。「自分の頭で考える」とは既成の権威に従わないことであり、それは彼の野人好みや優等生嫌いにも通じることだろう。人事にかんして長田さんの京大嫌いが年々高じていくのを私は傍で見ていたが、その理由は十分に理解できた。もつともそれに並行して東大好きが高じていったのは皮肉な現象であるが。なお「フランス料理」ばかりを食べ歩いてきたわけではない。オデンもスシも中華料理も、要するにあらゆるうまいものを食い歩き（これは当時のプロテスタント的立命館に対する反抗であった）、飲ん

だ後に甘いケーキを食う奇妙な習慣もあった（糖尿病の始まりか？）。長田さんの思い出話は、歴史家にもかかわらず間違いが多いからつけ加えておく。

3

一九六〇年代の終わりから七〇年代を通し、さらには九〇年代の始めに長田さんが文学部長になるころまで、私たちの付き合いはどこか無頼派を気取るようなところがあった。文学部で私たちは反体制少数派だったが、文学部自体が学内では少数派であった。少数派というのは学内政治やイデオロギーに限らず、食べ物や服装の趣味にまで至っていたようである。それで私たちは授業のあとや、とりわけ教授会のあとには憂さ晴らしに街に出て、いっしょに映画を見たり、うまい物を食べに行ったりした。私たちというのは長田、中原（あの皮肉屋で慎重居士の中原さんが結構いっしょに付き合ってくれたのは今から考えると驚きだ）、松宮、神保、石井、後には佐々木や小林さん、大戸さんの顔も思い浮かぶ。結婚したばかりの松宮さんの自宅に夜中に押しかけて一夜をともに語り明かしたり、これも夜おそくに芦屋の神保さんのお宅に押しかけてごちそうになったりしたこともあった。あれはいったい何だったのか。長田さんは「青春」と書いているが、いまでは二度と起こりえないことではある。

長田さんは一九七四年九月にアメリカカ学術会議（ACLA）招聘研究員となってプリンストン大学にむかい、七六年三月まで家族同伴でプリンストンに滞在する。私の方は七五年の十月から七七年の九月までパリに滞在し、パリ第三大学東洋語東洋文化研究所（いわゆる東洋語学校）で教えることになった。今度は森有正さんが招いてくれたのだ。パリに行くのは西回りで行くのが普通であるが、すでに長田さんがプリンストン

に行っていたから、これ幸いとアメリカ経由の東周りで行くことにして、プリンストンの長田さんの宿舎で一週間近くも泊めてもらった。

プリントンは美しい緑にかこまれた夢のような学園都市であったが、最初に耳にしたのは、キャンパスをジョギング中の女子学生が殺されたというニュースであった。長田さんは大学で一室をもらい（ウッドワードのような著名な歴史家の後楯がありおそらく破格の待遇をうけていたのである）、快適で充実した研究生生活を送っているようであった。大学を案内してもらい、学内のレストランで食事をし、日本研究で有名なマリウス・ジャンセンをはじめ何人かの教授に紹介されたが、名前が思い出せない。最初のフランス留学のときにパリで知り合ったサンドラ・シユアレスが友人といっしょにニューヨークから会いに来てくれて、アインシユタインが居たという研究所を草むらの間からのぞき見たこと、同じくプリンストンに招かれた丸山真男の武勇談（長田さんは丸山真男に気に入られ帰国後も付き合が続いていた）、北大の古矢旬さんがぎっくり腰で動けなくなり一晩トイレに閉じこめられていたという話（古矢旬さんにはその後仙台のアメリカ学会や北海道でお会いした）等々、それにハドソン川の岸をドライブしたこと、フィラデルフィアまで連れていってもらってうまい中華料理を食ったことなど、三十年以上も昔の思い出は混乱してまとまりがない。

それから一年半ほど後、今度は私が、帰国の途にあった長田一家のパリ案内をする番だった。そのときはより鮮明に覚えている。長田さんはパリのアメリカ人といった印象だった。パリの街の細々としたスケールの小ささがお気に召さなかったようで、フランスで一番美味とされる肉のうすいカキ（ブロン）を食わせたら、アメリカのカキはもっと大きいと御不満であった。セーヌ川の中州にある自由の女神像を見せたら、ニューヨークの自由の女神のミニアチュアが置かれていると思っ

らしい。アメリカ史の大家に、自由の女神像の由来について、こちらが本家であることを説明するはめになった。

パリのさまざまな歴史建造物は彼の関心を引かず、唯一長田さんが関心を示したのは、オペラ座でヴェルディの『運命の力』を見たときぐらいだろう。ちょっと歓待しようがなくて当惑した感じが残っている。それにもうひとつ困ったことは、プリンストンでお世話になったときにうすうす感じていたことであるが、長田夫妻の関係がかなり険悪になっていたことである。街中をいっしょに歩くときも夫人はめったに口をきかずとにかく夫の反対側を歩くので、二人の娘さんたちがどちらについてよいものか、二人の間を歩きつ戻りつしていた情景が目には焼きついている。私は長田夫人にも好意をもっていたので、二人が抱えこんでしまった不幸を嘆くのみであった。

4

アメリカで二度目に長田さんに会ったのは一九八五年の三月だと思う。今度は長田さんはフルブライト上級交換教授の資格で、コロンビア大学とニューヨーク市立大学の客員研究員となり、八四年の九月からニューヨークのハドソン川に近い、ウエスト・エンド・アヴェニューにひとり住んでいた。私の方は、八三年の夏から始まったモントリオール大学客員教授の任期がちょうど終わるころで、モントリオールからニューヨークに寄っていっしょにニューヨークリンズに行く計画を立てたのである。飛行機の窓から眺めるとカナダはまだ雪と氷の世界であるが、着陸したニューヨークはすっかり春めいており、ニューヨークリンズは緑ゆたかな初夏の気候であったことを思い出す。ニューヨークでは数日長田さんのマンションに泊めてもらい、ミュージカルやジャズを聞きに行き、

うまいものを食べさせてもらった。ある日ニューヨークで一番のレストランに行こうということになって、ラ・チュエリッパに予約なしで入れたのは奇跡的であった。なんだアメリカでも結局はフランス料理じゃないか、と悪態をつきながら結構満足したことを覚えている。(その後、息子の陸男が一週間ほどお世話になったことがあった。やはりジャズやミュージカルに連れていってもらい、このニューヨーク滞在は彼のミュージシャンとしての自己形成に大いに役立ったと思う。後ればせのお礼を言いたい。もともと帰国後の本人の弁によると、長田さんはデートで外出が多く、その間ハーレムその他、長田さんが行ってはいけないと言った所ばかり行ってきたらしい)。

長田さんのアメリカにおける友人の一人であったネルシア・ドラノエの下宿のパーティーに招かれたことも忘れがたい。数人の招待客はわれわれ二人を別とすればみな国籍が違っていた。かわした会話の内容は忘れてしまったが、そこでチキンにヨーグルトを塗って丸焼きにすることを知った。ネルシアはパリ大学(ナンテール)の専任講師で、すでに六年の学生運動やアメリカの先住民にかなする著書を出していた。私には、パリで彼女のお世話になり、八五年に半年の留学が許されたときには、パリ十九区のジャン・ジョレス通りにある彼女の弟さんのアパルトマンを借りたり、彼女が夏のヴァカンスに出て留守の間、カンカンポワソンの通りの彼女のアパルトマンを借りて夏休みを過ごしたこともあった。ネルシアはアルジェリア育ちで、植民地育ちということが三人の共通点であったことを今に思う。

ニューオーリンズの旅は楽しかった。ミシシッピの広大な流れ。亜熱帯の植物に出会ったのはこれが初めてであった。シャンパンをグレープフルーツのジュースで割ったミモザを飲み、クレオール料理を食うという願望はかなえられた。ただし通りに面してあちこちから聞こえてくるジャズはいかにも観光客目当てであるし、ニューオーリンズでフラン

ス語をしゃべるといふ私の期待は裏切られた。その代わり、イタリア系の人たちのイースターのお祭りに出合い延々と続く行列の中に入りこんで夢中になってシャッターを切り、たちまち数本のフィルムを使いきってしまった(そのころカメラにこっていたらしい)。こうしてニューオーリンズのその時の証拠写真は、ニューヨークにおける若い長田豊臣のさまざまなプロフィールとともに一冊の写真帳の大部分を占めている。いま私はそのアルバムを見ながら書いているのだが、写真に写った二人はなかなかのハンサムで、まだ若い女の子に声をかけられても不思議のない若者であった。

こんな風に書くと二人は遊んでばかりいた印象を与えるかもしれないが、海外で過ごしたこの時期は二人にとって生涯で最も集中して勉強のできた時代であったのかも知れない。このアルバムの中に、ニューヨークの長田さんの部屋で撮った一枚の写真がある。長田さんは冬のジョギングの出で立ちで、彼は毎朝街に出て走っていたことがわかる。重要なのはその後写っている本棚で、これを拡大鏡で見ると長田さんがニューヨークで何をやっていたか、どんな勉強をしていたかが推測できる。もう一枚は本が乱雑に山のように積まれた書斎の仕事机の前に座った長田さんで、これは執筆の苦闘の最中にあつたことを語っている。私の方はモントリオール大学で週二回、日本の戦後史と戦後文学の授業を担当していた。それぞれ三時間続きの授業で、それをフランス語でやるのだから準備が大変であった。この時の戦後文学にかなする授業の講義録は、『一九四五年以後の日本小説』のタイトルでフランスで出版され(PJF, 1988)、ひき続き日本語版が『日本の戦後小説―廃墟の光』のタイトルで岩波書店から出ている。

長田さんのこの時期の研究は、一九九二年になって『南北戦争と国家』(東京大学出版会)となつて結実した。これはたいへんな力作で私は一読

驚嘆した。この本には長田さんのアメリカ史研究に対する強い思いがこめられており、彼の研究者としての長所と素質がきらめいている。書評などでも高く評価されたが、もっと高く評価されてもよいだろう。それにこの本は私からみれば、アメリカ史研究にはめずらしい「国民国家論」なのである。例えばこの本の序章は次の文章で締めくくられている。

「これらの分析で意図していることは、南部奴隷州の反乱を鎮圧し国家統一を回復するための戦いであった南北戦争が、その戦争目的の遂行の必要からも連邦政府の機能を拡大強化することによって建国以来の合衆国のばらばらの政治組織 (polity) と地方拡散の経済を、組織化もしくは、国民化 (nationalization) し、政治制度においても国民意識においても、近代国家としてのアメリカ合衆国を創りあげることになった所謂ステート・メイキングの時期そのものであったということ明らかにすることである。」

私はこの本を読んで、普段はあまりそういった話はしないのだが、私たちが異なる分野で同じような問題意識をもって仕事をしていたことを知り、嬉しかった。しかし私には一つの予感というか確信があった。それは長田さんはこの本に自分の全てを注ぎこんでおり、いまではいわば燃え尽きた状態であって、おそらく次の本は書かないであろう、という予感である。それを私は「長田さんについてはライフワークを書きましたね」という表現で言ったのであるが、長田さんはそれを正確に理解して、大いに憤慨してみせた。だが学者は一冊の良い本を作れば（あとは野となれとは言わないが）、それでいいのではないかと私はいまでも思っている。

記念号への執筆を頼まれたとき、私ははじめ高橋さんに、それでは何か大論文か『南北戦争と国家』の論評のようなものでも書きましょう、と答えた。ところが高橋さんは大慌てで、いや論文ではなくてエッセー

か思い出の記を書いて下さい、と言う。どうやら西洋史学科のセクシヨナリズムは、他領域の私を研究者としては受け入れたくないようだ。これは前にも経験したことなので私は黙って了解し、御覧の通りの雑文を書くことにした。これも結構、楽しく書いていたのだが、おかげで長田さんの『南北戦争と国家』はおそらく最高の評価と賛辞を受ける機会を失ったのである。

長田さんとは何度かいっしょに仕事をしている。「戦後価値の再検討」の研究会では、数人の仲間（西川富雄先生を別とすればいつもの飲み仲間であった）といっしょに調査旅行に出かけて上山市で「山びこ学校」の佐藤藤三郎さんに会ったり、兵庫県の出石の近くでお寺の住職をしていた東井義雄さんに会いに行ったりした。その成果は『やまびこ学校』と『村を育てる学力』―ある戦後史―と題された長田さんとしては異色の論文となった（一九八六年『講座現代日本社会の構造変化』有斐閣、第6巻所収）。久米邦武『米欧回覧実記』を読んだ研究会では、「岩倉使節団の見たアメリカ―ギルデッド・エージのアメリカ』を書いてもらった（『米欧回覧実記』を読む）法律文化社、一九九五年、所収）。この研究会がきっかけで長田さんに誘われ、仙台で開かれたアメリカ学会で三、四十分ほどの報告をさせられたことを思い出した。『実記』の第一分冊に収められているアメリカにかんする記録が合衆国をいかに描いているかを述べ、この記録こそが日本におけるアメリカ学の先駆であったことを述べたが、あまり反響はなかった。学会のあと数人のグループで近郊にある宿に出かけ、酒を飲んでから温泉に長くつかりすぎたせいか、京都に帰ってから軽い心筋梗塞を起こして病院にかつぎこまれたようなことがあって、忘れられない学会である。

長田さんが総長になってからは、『グローバル化を読み解く88のキーワード』（平凡社、二〇〇三年）に「日本の大学」という項目で書いてもらった。多忙な中でそんな時間はないことは分かっていたが、事は大学

問題であり、ここで世界的な視野に立って大学総長としての見識を披露して欲しかったのだ。それに大学論は、六八、九年の大学紛争時代に、われわれが熱中し、真剣になつて論じたテーマであった。それで私は最近翻訳が出たビル・レディングズの『廃墟のなかの大学』やウォーラス・テインの大学論などいくつかの参考文献を渡して執筆をお願いした。長田さんが苦勞してこの五枚半ほどの原稿を書いてくれたことには感謝している。だが正直言ってこれは少し過大な期待であつたようだ。届けられた原稿には、国立大学に対して大学生の大部分を占める私立大学の重要性を説く、長田さんの持論以外にこれといった新しい観点は見当たらなかった。このままで載せるわけにはいかなないので私は大幅に手を入れることにした。例えば最後の結論の部分である。

「さらには、わが国の高等教育再生のためには、大学生の八割近くの教育を引き受けている私立大学の経験と実践をどう高等教育制度再編の仕組みのなかに組み入れていくのかという視点が不可欠なものとなる。グローバル化の波は、大学を学園から企業に、学生を消費者に変えつつある。そのなかで大学はいかなる機能をもち、いかなる形態をとるのか。グローバリゼーションの認識と批判の拠点であると同時に、未来につながる創造的共同体としての大学の可能性が問われている。」——お分かりのように右の文章の前半は長田さんの文章であり、後半は私が勝手に追加したものである。おそらく総長としての長田さんの意に反しているのどこに公表し、罪は西川にあることを認めておきたい。長田さんに無理矢理書かせてしまった文章を読みながら、私は大学総長とは、いかなるものであり、その地位にある人をいかに変えるかについて改めて考えさせられた。

5

最後に本稿の性質上、総長長田豊臣についても少しは書いておくべきだろう。長田さんが総長になったのは、学園紛争のおかげが大きいと思ふ（おそらく彼は同意しないだろうが）。学園紛争の時期に立命館出身者としての長田さんの愛校心は強く目覚め、それ以後立命館における彼の存在が次第に大きくなるのを私は少し離れたところからずっと見ていたからである。私はまた、学部長になり、副総長なり、総長になつていった長田さんの後ろ姿のなかに、かつて敗戦後のソウルで悪ガキを集めて走り回っていた長田少年の面影をずっと見ていたような気がする。闇屋の親玉になろうと大学の総長になろうと相似たもので、大してかわりはないだろう、と私の中の無頼派はつぶやくのである。

だが総長への道に至るまでに乗り越えなくてはならないいくつかの危機と決断があつたようだ。私は長田さんが立命館を辞めてアメリカの大学に勤めることを考えて悩んでいたときのことを覚えている。私は反対だつた。アメリカで何を教えるつもりかと尋ねると、日本語を教えながら日本学の勉強、それも江戸期に坎して研究を始めたい、という答えがかえつてきた。とんでもない、長田さんは少しは日本史を勉強しているが、そのころ江戸期は流行で、徳川時代に坎する研究が次々と出されており、それに伍していくのは大変だし時間もかかると説得したことを記憶している。ともあれ信じられないほど無茶な話だつた。長田さんがそんなことを思いつめて考えるようになったのは、プリンストンで知りあつたアメリカ女性と仲が良くなつて、強烈なアプローチを受けたことが発端のようであつた。長田さんが女性にもて、女難の相があることはよく知っていたし、彼はそれらの事実をかくしだてなく私には話すことが多かつた。長田豊臣の人間論を書くときにはこの部分はかなり重要

な章になるのだが、ここでは省略しよう。

一九八八年私は新設の国際関係学部に移籍したので、長田さんの二期にわたる学部長時代を直接には見ていない。次第に独裁的になってゆく長田学部長の豪腕ぶりを、中原さんや文学部時代の昔の同僚から、そして時には長田さん本人から聞くだけであつた。長田さんは助教時代から、おれは総長にしかならないと公言していた（本人はそれを細々とした役職から逃げるための方便だと言っていたが）。人は結局はなりたいたいものになる、というのが私の人生観だから、それは大いにありうることだと思つてた。不思議なことに、長田さんが副総長になる頃には立命館には長田さんに対抗できるような人材が居なくなつてた。同じ大学の親しい友人が総長になることは、時に便利だと思ふこともあるが、概してあまりうれしいことではない。私たち旧文学部の仲間（例の「反体制少数派」）は、始めのうちは長田総長を中川会館の捕らわれ人のように思つてた。中原さんなんかは、長田君がしんどそうだから中川会館に見舞いに行つてくれ、といったような電話をとくとき掛けていた。だが時とともに様子が変わつてきた。はじめは与えられた原稿をそのまま棒読みにしていた長田総長が、いつの間にか自分で号令をかけ始め、いまではその自分の言葉を信じているかのような気配である。

長田さんが在任中、私は時々総長室を訪れた。頼みごとのある場合もあるが、多くは何となく会いたくなつて出かけるのである。秘書課に電話すると阿曾沼さんが（後には太田さんが）親切に取り次いでくれる。阿曾沼さんとは気心の知れた長い付き合いで、彼が文学部の事務室にいたときには、フランス語の試験問題のタイプを打ってもらつたことがある（阿曾沼さんは事務ではめずらしくフランス語ができた、私はいまでもタイプもワープロも打てない未開人だ）。太田さんは私が定年までいた国際関係学部の出身だから何となく気が楽だ。役職に関係のない教員がこんなふう

畏友長田豊臣教授の総長御退職を祝つて

にしばしば総長室を訪れるのは、おそらく例外的だろう。そして私たちの会話の調子は三十年前とほとんど変わらない。

もつとも本人は気がついておるかどうか、長田さんの好みや趣味に変化が生じていることは書いておかねばならない。秩序派になつてのが、例えば私が目の手術をした後から黒いメガネをかけるようになったのが、彼には気に入らない。ヤクザのようだという。長田さんはずかつて自分が同じようなサングラスをかけていたことを忘れておるようだ。服装も同じだ。教員のラフな服装を嫌う。これもかつて自分がどんな服装をしていたかを忘れておる（近いうちに彼の若かりしころの写真を見せてやろう）。だいたい前に大学の入学式や卒業式のような式典にはフォーマルな服装（黒の略礼服？）を着用するようにとのお達しがあつて、ヤクザの総会でもあるまいし、と私は憤慨し、大いに笑つたのであるが、長田さんの趣味はこのお達しの方向に近づいておるようだ。かつての長田さんのようにジーン姿で総長室に現れて欲しいという私の願いはかなえられそうにない。学生の動きに対しても同様だ。二年ほど前に安倍晋三が講演に来たとき、学生たちが阻止のデモをかけた。そのなかに先端研の院生がいて、理事長が公の場でこれを厳しく批判した。私は安倍のそれまでの言動（憲法や教育基本法を変え若者を戦場に送りかねない）からみて、こんな人物を立命館に招くのは間違いだし、立命館の学生ともあるうものがそれを座視するとは思いたくなかつたので、学生たちの行動は私にはむしろ救いであつた。それで、後に長田さんが理事長と同じ口吻をもらしたのを聞いて、信じられない思ひだつた。三十年前の長田さんだつたら何と言つただらうか。

地位は人を育て人を養ふ。長田さんは総長になつて私たちの知らない世界に足をふみ入れ、そこから私たちの世界を見直すことを余儀なくされた。人間が進歩し、大きくなるとはそういうことだろう。だが失わ

れていったものも大きいのではないか。長田さんの総長としての任期がこの十二月で終わることは、残念ではあるが、しかし古い友人としてはうれしいことでもある。いま振り返ってみると、総長室での対話は楽しいものであった。そこでは昔と一続き時間が流れている一方で、長田さんの新しい体験から私なりに多くを学んでいた。朱雀に立命館の繁栄を誇るかのような大建造物ができて、立命館の首脳部が移転してしまっただけで、中川会館の総長室は私の生涯の半ばを占める立命館時代のなつかしい思い出の場所になったのではないかと思う。これも長田さんのおかげである。というのは長田さんが居なければ中川会館は立命館で最もいやな場所として私の記憶に残ったかもしれないからである。

6

先端総合学術研究科の設置については始めの頃に私も少し企画に加わっていたが、すでに停年を過ぎた私を研究科のスタッフに押しこんだのは長田総長である。先端研には長田さんの学問と大学に対する夢と主張がこめられていて、それを具体化するについては渡辺公三さんと事務局のスタッフの血のじむような、まさに献身的な努力があった。その労苦を少しは知っていたので、何かお役にたてることがあればいいなという気分になっていたことは確かである。しかし出来あがった趣意書には、私の嫌いな公共、共生、表象といった言葉や東大駒場的な用語が散見し、ちょっとした違和感を抱いたことを覚えている。それに私にはすでに退職後の計画ができていて、残り少ない人生のなかであと五年を差し出すのはかなり覚悟のいることであった。長田さんの要望を受け入れたのは、それが長田さん流の友人に対する好意の示し方であり、またこの新設大学院に長田さんの長年の夢の実現がかけられていることを

知っていたからである。私の任期はまだ一年余り残されているが、この先端研で若い個性的で優秀な同僚と学生に囲まれて大学における最後の年月が過ごせたことを幸福だと思っている。もっともすでに七十を過ぎた私は体力的にも、お役に立つよりはお荷物になることが多かったのではあるが。

長田さんの夢を私なりに一言で要約すれば、優等生ではない、個性的で野性的な、自分で考え行動することのできる若い人材（私の言い方では文明人に対する野蛮人）を集めることであった。それは私学の理想であるが、長田さんの自己像の投影でもある。さらに言えばそれは私自身の大学の理想像と重なるものであった。長田さんとは本当に長い付き合いであった。こういう文章を書いていて改めて思ったことであるが、大学の上層部ではあまり評判のよくない私と付き合いを続けるのは、総長を目指し、あるいは総長となった長田さんにとっては、いろいろ差し障りのあることが多かったのではないか。

もともと私の方でも長田さんから迷惑をかけられたことが全くなかったと言えば嘘になるだろう。このような野人と付き合いのは決して楽なことではない。久しぶりに会って最初に彼が口をきくのは、禿げたとか年を取ったとか腹が出たとか、駄馬のように足首が太いとか（彼は自分がサラブレッドの系統であるのが自慢なのだ）、ダサイ服を着ているとか、メガネがどうこうだとか、それに話が興に乗ってくると昔きいたエピソードや冗談を連発する（時にはそれが十七回目の冗談であったりする）。こうしたことは一般の教養人にはありえないことだから、それが長田一流の照れ隠しや親愛の情の表現であることを知らない相手は、とまどい傷つくだろう。そこまではまだ許せるとして、言文研の研究会などで他大から来ている若い研究者を見つけて、お前ら西川におべっか使いやがって、などと悪態をつくのには困った。誇り高い若手研究者は、その一

言で立命館には近づかなくなる。

長田総長が誕生したとき、昔の仲間が集って祝杯をあげたのであるが、私たちに共通した心配がいくつもあった。一つは長田さんの失言癖とでも言うべきもの。もう一つはセクハラ問題である。学内政治にかかわる失言もセクハラにかかわる失言もいくらかあったようだが、大事に至らなかつたのは幸いだった。長田さんの独自のレトリックや親分的とかかなり家父長的な性格は失言問題を起こしやすいのであるが、その反面に隠されている意外に繊細な心づかいや人間関係に対する配慮があつて、相手に失言を追求するような気力を失わせるように作用したのではないかと推測している。だが自分に合わせて狭い視野で判断することはやめておこう。長田さんには私の知らない領域があり（とりわけ総長になつてからは）、私の知らない才能を隠し持っているはずだから。

長田さんが総長になつたとき、彼が破産した立命館バブルのあと始末をするようなことにならないことを願つた。だが実際には立命館は拡大発展を続け、長田さんは現理事長とともに最盛期の立命を代表する人物になつてしまった。その貢献はたたえるべきだろう。だがこれから先はむずかしいのではないか。私は友人として彼がこういう世界から早く身を引いて私たちの世界に一日も早くもどつてきてほしいと思つている。だが、一度総長をした者は総長を辞められない、たとえ辞めてもそうし

た世界から身を引くことはむずかしそうだ。私としては健康と成功を祈るしかないようである。

この文章をどのように閉じればよいのか、よくわからない。終わりに近づいたとはいえ、私たちの人生はまだ続いており、私たちの長い付き合いもまだ終わっていないから結論が出せないのである。とりあえずは長田さんに対する心からの感謝の気持ちを記して終わりにしよう。

長田さん、長い間の総長職ごころうさまでした。それに私のような偏屈者に辛抱強く四十年近くも付き合つてくれて、ありがとう。

二〇〇六年十月十七日

付記

この文章は長田さんが書いてくれた「畏友西川長夫教授の御定年を祝つて」のお返しあるいはパロディとして書いた。書きながら困つたのは長田さんの呼び方である。時には長田君、あるいは長田と呼びすてにしたい欲求に悩まされながら「長田さん」で通したのは長田さんの元の文章が「西川さん」で一貫していたからである。

（本学先端総合学術研究科教授）